

いきいき 衍田人

刺しゅうの仕事に興味に代え 作品展を開催

小林 てるさん (88歳・矢場)

子どものころ運動会や陸上競技大会などで走り幅跳びやリレーの選手に選ばれるほど、運動が得意だった小林さん。一方で手先が器用だったこともあり、学校から帰るとすぐに編み針を手に取り編み物に没頭したそうです。

「私が小さいころ、毛糸は高価で貴重品だったため、小さくなったセーターなどは編み直して再利用するのが普通でした。また、編み物ができる人が少なかった当時、私の先生は毛糸を売っている店の人。店に行くたびに自分の知らなかった編み方を教えてもらうことができたので、毛糸を買いに行くのがとても楽しみでした。」好きなことから上達も早く、小学6年生のころには弟や妹のセーターを編んであげられるほどになりました。洋裁の基礎を正式に学ぶため18歳から東京の洋裁学校へ通った小林さん。「結婚後、刺しゅう店を

2年前に商売をやめてからは、刺しゅうも趣味のひとつとなりました。仕事で使っていたミシンを再び使用し、部屋には作り上げた作品の数々が積まれています。「せっかく作ったのだから皆さんに見ていただいたらと娘が計画してくれたので」と、書道で最高師範段位十段のご主人が書いた書とともに『夫婦二人展』として今年9月に市内の金融機関のギャラリーで作品展が開催されました。「100人以上の方が足を運んでくださって、ねぎらいの言葉もいただきました。100歳でまた記念の作品展をしてみたいですね」と作品展の開催を感慨深く語る小林さん。50年以上も刺しゅうに携わり思い出せばいいミシンの付き合いはまだまだ続きそうです。そして、小林さんの自宅からは、これからも楽しいミシンの音が聞こえてくるでしょう。



私の作品

◎皆さんの作品を募集しています。
◎俳句は毎月5日まではがき・封書で広報広聴課へご応募ください。

俳句

佐間 藤田 素仙
わが余生陶芸三昧とろろ汁

谷郷 増山 忠男
忍城の静寂破る蟬の声

持田 太田 保夫
心経の心を知るや秋の蟬

持田 岡本千寿子
美形なるえのころ草を茶花とす

白川戸 鈴木 都子
歩むほど花野は人に優しくす

荒木 小林 康男
天と地を結ぶ棚田や曼珠沙華

須加 須加かつ江
尺玉も線香花火もある人生

南河原 若林 水翁
風に来て風に流るる赤とんぼ

馬見塚 永沼規美雄
跳箱の五段のとべて秋半ば

下忍 島崎 もと
秋扇少しのうそをたたみ込む

西新町 小宮 武

尾花咲く土手の散策目に眩し

城南 町田 達男

神殿で手を合わせるもかみなづき

城南 橋本千枝子

廃屋や住人の如石榴の実

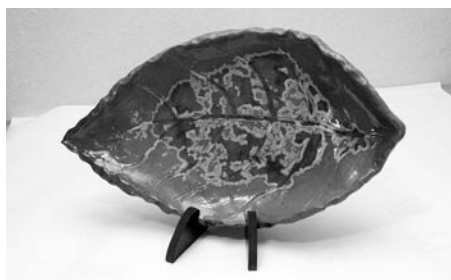
本丸 関 常子

折からの時雨に頬をまかせつゝ

城西 榎原しずか

飛び箱の五段六段ちろ鳴く

(木島 斗川 監修)



『紅葉の秋』(陶芸)
石川 恵美子 (南河原)